

## 概要

阿比留怜子

本論文では戦争経験者と戦争未経験者が描く戦争マンガの違いから見る戦争マンガの役割を論じる。序章では研究の背景・目的、1章では先行研究として戦争マンガの歴史、2章では分析対象・分析方法の提示、3章では実際の内容分析・構造分析、4章では3章までから考えられる結論を示した。次に、本論文の概要を示す。

1945年に終戦を迎え、現在戦後70年以上が経過することとなった。厚生労働省は戦後70年を迎えた2015年に、被爆者健康手帳を持っている全国の被爆者は約18万人となり、平均年齢は80歳を超えたと明らかにした。また、広島出身である私は、他県出身の人達と比べ多くの平和学習を受けてきたように思う。その中で最も印象に残っていたのは、図書館で読んだ「はだしのゲン」であった。戦後世代である私達にとって戦争というものは現実味のないものとなり、風化してきていることは事実である。このような時代の中で、マンガが「戦争を伝える」にあたりどのような役割を果たし、また戦争経験者と戦争未経験者が描く戦争マンガにどのような違いがあるのかを分析する。

分析対象のマンガは、実際の場所・話を元にして描かれたもの、終戦の1945年頃を描いたもの、比較的知名度の高いものという基準により、戦争経験者では中沢啓治の「はだしのゲン」、水木しげるの「総員玉砕せよ!」、戦争未経験者ではこの史代の「この世界の片隅に」、おざわゆきの「あとかたの街」を選んだ。分析方法としては内容分析・構造分析を各作品で行った。

結果として、戦争経験者と戦争未経験者が描く戦争マンガの違いは「描くものの違い」が最も大きいと考える。戦争経験者は戦争を起こした者に対する怒りを元に「戦争」の過酷さ・悲惨さを描いていた。これに対し戦争未経験者は何気ない日常がどれだけ幸せかという「平和」を描いていると感じた。これらのことから現代における戦争マンガの役割は、現実にあった戦争を紙に残し、戦争は昔に終わったことではなく今も続いているということ、戦時中の悲惨さや日常というあらゆる視点から、絵と文字というわかりやすさで子供から大人まで伝えていくものだと考える。